

光源氏の述懐

——御法巻と幻巻の間——

上野 辰義

一 光源氏の述懐

二 女方での生活

三 二つの述懐の間

四 桐壺巻へ

源氏物語の御法巻と幻巻には、阿部秋生氏の指摘により広く認識されるようになった光源氏による二つの述懐がある。これらの述懐は基本はよく似ていながら、四、五箇月の時間を間において微妙な相違点もある。これらの相違がどのような事情で生じ、どのような意味を持つのかを、考えた。外聞を避けて女方に籠り、勤行の日々と、紫上と光源氏とに昵懇の侍女たちとの思い出話の累積が、条件的には大きく作用している。

一 光源氏の述懐

晩年の光源氏には、阿部秋生氏の指摘により広く認識されるようになったよく似た内容の述懐が、御法巻と幻巻にある。

御法巻の述懐は、光源氏五十一歳の八月に紫上が他界し、その忌籠りに入ったころのものである。

いにしへより御身のありさま思しつづくるに、鏡に見ゆる影をはじめて、人には異なりける身ながら、いはけなきほどより、悲しく常なき世を思ひ知るべく仏などのすすめたまひける身を、心強く過ぐして、つひに
来しかた行く先も例あらじとおぼゆる悲しさを見つるかな、今は、この世にうしろめたきこと残らずなりぬ。ひたみちに行ひにおもむきなりに、障りどころあるまじきを、いとかくをさめん方なき心まどひにては、願はん道にも入りがたくや、とややましきを、この思ひ少しなのめに、忘れさせたまへ、と阿弥陀仏を念じたまつりたまふ。

(御法五一三)

また幻巻の述懐は、翌年一月、女房たちと紫上の思い出話をした際のものである。

「この世につけては、飽かず思ふべきことをさをさあらまじう、高き身には生まれながら、また人よりこと

に口惜しき契りにもありけるかな、と思ふこと絶えず。世のはかなく憂きを知らすべく、仏などのおきてたまへる身なるべし。それを強ひて知らぬ顔にながらふれば、かくいまはのゆふべ近き末に、いみじき事のとちめを見つるに、宿世のほども、みづからの心の際も残りなく見はてて心やすきに、今なんつゆのほだしなくなりたるを、これかれ、かくて、ありしよりけに目馴らす人々の今はとて行き別れむほどこそ、今ひと際の心乱れぬべけれ。いとほかなしかし。わろかりける心のほどこかな」とて、御目おしのごひ隠したまふに、

(幻五二五)

この幻巻の述懐と御法巻の述懐とは、阿部氏や丸山キヨ子氏の言われるように、共通点や相違点がある。触れられる内容項目は、両者ほぼ対応しているが、述懐される場が、前者は光源氏の心中思惟、後者は行いの傍ら、紫上縁故で光源氏の召人でもあるような女房たちを相手に語られたものであるという大きな相違の他、具体的な内容においても、細かい違いがある。

内容的に大きな共通点は、両者とも光源氏が「享受した生涯の悲しく辛い経験を、この世の無常として、あるいはこの世の憂きこととして、自覚させるために、仏が、善巧方便と計らい備えてくれたものであったことを受けとめて

いること」(丸山キヨ子氏)であるが、その「享受した生涯の悲しく辛い経験」が、御法巻では「鏡に見ゆる影をはじめて、人には異なりける身ながら、いはけなきほどより悲しく常なき世」と、先天的な優れた資質や天皇の御子という境遇と対置される近親者との縁の薄さ(母更衣、祖母へ夕顔、葵上、父院、へ六条御息所、藤壺、岳父丈母)が、主になっているが、幻巻では現世でのほぼ理想的な境遇に對置されているのが人並み以上に残念な宿縁、という具合に、より抽象的で広範囲なものになっている。

この幻巻での「人よりことに口惜しき契り」とは、愛執分野では、丸山氏の説かれるように、藤壺への飽き足らぬ思慕と悔恨、六条御息所への罪の意識(「さるまじきこと」どもの心苦しきがあまたはべりし中に、つひに心もとけずむすぼはれてやみぬること、二つなむはべる)薄雲四五九、紫上への悔恨、また、権勢分野では冷泉帝に後嗣がなかったこと(「六条の院は、おりゐたまひぬる冷泉院の御嗣おはしまさぬを、飽かず御心のうちにおぼす。同じ筋なれど、思ひなやましき御ことなくて過ぐしたまへるばかりに、罪は隠れて、末の世まではえ伝ふまじかりける御宿世、口惜しくさうざうしくおぼせど」若菜下一六五、―これを廻れば光源氏自身の即位を、「みづからも、もて離れたまへる筋は、さらにあるまじきことと思す。∴、宿世

遠かりけり」(澤標二八六)と、認識面では否定しながらも意識下では庶幾して不満に思っていたかもしれない、女三宮の密通と出家(「みづからの御宿世も、なほ飽かぬこと多かり。あまた集へたまへる中にも、この宮こそは、かたはなる思ひまじらず、人の御ありさまも思ふに飽かぬところなくともしたまふべきを、かく思はざりしさまに て見たてまつること、と思すにつけてなむ、過ぎにし罪許しがたく、なほ口惜しかりける。」横笛三五二)、などがあるだろう。

これによつて、仏が光源氏に認識させようとした世の樣も、御法巻では「悲しく常なき世」と無常が主であるのに對して、幻巻では「世のはかなく憂き」と不如意が加わっている。

紫上の死の捉え方も、御法巻では「来しかた行く先も例あらじとおぼゆる悲しさ」と空前絶後の思いであるのに對し、幻巻では「いまはのゆふべ近き末に、いみじき事とぢめ」と晩年における最後の大事件と意識し、よつて出家の障害がないと考えるにも、御法巻は紫上を失ったことで、もうこの世に心残りが無いとするのに對し、幻巻では晩年に体験した大事件によつて自身の「宿世のほど」も「心の際」も見果てたから何の障りがないとする。幻巻では冷静に自己を把握しているのである。(阿部氏はこれを、「一往

の諦念である⁽⁵⁾」とされる。「宿世のほど」と「心の際」を「残りなく見はて」たとは満ち満ちを取りあわせて「わが身はこれだけの代物と見きわめた、という意味であらう⁽⁶⁾」し、その「心の際」とは「口惜しき契」と、受けとめ続けてきた『愛執の心』に対する自己評価（丸山氏）であつたろう。

そして述懐の先にあるものも、御法巻では、空前絶後の悲しみにおぼれたままでは、仏道修行にも障害が出るとして、気持ちを落ちつけようとするのに対し、幻巻では自己の生涯の不如意も愛執の罪も思い知らされたのに、出家に際してはなおも情にひかれるだろうと己の心の弱さを見ている。

このように、御法巻と幻巻の二つの述懐の間には、紫上喪失後の衝撃の強さにより、世の無常と愛執の強さが前面に出ている御法巻と、紫上の死を契機に自己の人生の終末を見据えて宿世の意味と性向の限界を見つめてよいだらうが、この深化はなぜ可能になったのだらうか。これは単に両者の間にある四、五箇月の時間の推移が自然ともたらしめたものではないだらう。この四、五箇月の時間の推移とともに、そこに何が起こり、どのように光源氏が過ごしたかが大事であらう。

以下、そのことを考えてみる。

二 女方での生活

御法巻と幻巻の述懐の間に何が起こったかを見ていこう。まず、光源氏は、紫上を野辺送りしてすぐ、出家の本願を遂げようとしたが、女を亡くして心弱く出家したと見られる世間体の悪さを考えて、出家を先送りした。そして、それに替えて、外部と接触を絶った女方に籠って、忌みの期間のみならず、勤行が常の生活に入っていた。「女方」という語は、源氏物語では結婚相手や恋人である女性の側を示すことがほとんどだが、ここでは妻や侍女たちが生活と家事職務の遂行を行う奥向きのエリアを指す。

すくよかにも思されず、我ながら、ことのほかにほれぼれしく思し知らること多かる紛らはしに、女方にぞおはします。仏の御前に人しげからずもてなして、のどやかに行ひたまふ。千年をももろともにと思ししかど、限りある別れぞいと口惜しきわざなりける。今は蓮の露も他事に紛るまじく、後の世をと、ひたみちに思し立つことためみなし。されど人聞きを憚りたまふなむ、あぢきなかりける。（御法五一七）

新日本古典文学全集中本五一八頁頭注二の指摘どおり、光源氏と紫上は「後の世には、同じ蓮の座をも分けんと契り

かはしきこえたまひて、頼みをかけたまふ御仲」(御法四九四)であつたから、ここでの光源氏の極楽往生を願う勤行の目的は紫上との再会であつたかもしれぬが、紫上が往生した明証は、一周忌を過ぎた幻巻十月になつても、「大空を通ふ幻夢にだに見え来ぬ魂のゆくへ尋ねよ」と詠じたように、光源氏にはない。また、光源氏は一蓮托生を藤壺宮とも願ひ(朝顔四九六)、女三宮にも口にしてゐる(鈴虫三七六)。だから、光源氏がこれから一年後、幻巻の年末において出家の準備をしていく頃には、将来紫上と再会する願ひを含むものだったとしても、その意識のおおよそは、いわゆる後世での極楽往生を期するものに近い状況になつていたのであらう。

この仏道修行は、そのように極楽往生をめざした後世を願う勤行であるが、同時に光源氏の気持ちに紛らわせ、落ち着かせる効果もあつたと思われる。これに先立つ御法巻の述懐で「阿弥陀仏を念じ」たのも「この思ひ少しなために、忘れさせたまへ」という理由であつたし、阿弥陀仏は、鎌倉時代初期の『無名草子』に、「人の恨めしきにも、世の業のわびしきにも、ものの義ましきにも、めでたきにも、ただいかなる方につけても、強ひて心にしみてもののおぼゆる慰めにも、『南無阿弥陀仏』とだに申しつれば、いかなることもこそとく消え失せて、慰む心地すること

て侍れ」と言われている。この後も、光源氏は、幻巻の一月に、女房たちと女三宮降嫁時の思い出を語つて紫上を追慕した後にも、「例の、まぎらはしには、御手水召して行ひしたまふ。」とある。三月、明石御方を訪れて、紫上を回顧して、夜を過ぎず帰つたあとに、「さてもまた例の御行ひに、夜中になりてぞ、昼の御座にいとかりそめに寄り臥したまふ。」とあるのも、紫上への思いを紛らわせる意図があつたのだろう。逆に、その後の五月の夕霧の推測した光源氏の行ひのさまや(幻五四〇)、八月紫上一周忌の宵の行ひに入る手水の際に、中將の君と交わした歌(幻五四四)からは、紫上への思いで、行ひに集中できない、あるいはしにくい状況がうかがえる。読経や念仏は意識を集中することだから、気持ちを落ち着かせ紛らわせるのに役立つことだろう。

こうして、勤行が常の生活は、光源氏に紫上への気持ちを落ち着かせ、冷静さをもたらすのに効果があつたらうが、これは、光源氏の意識の変化・変革をはぐくむ環境造りに関与したに過ぎないと言ふべきで、こうした環境の中で、二つの述懐における認識の変化をもたらしていったのは、この間に語られている、侍女ら、身近な人物たちとの紫上を話題としての語らひであつたらうと思われる。

このことについては、既に高橋文二氏が、幻巻の光源氏

は、紫上の思い出に没入し、生前の彼女の思い出を想像力を駆使して、再体験することで、喪失したものを回復し、心が慰藉され、沈静浄化されたのだと、説かれている⁸⁾。このことが盛んに行われるのは、幻巻の一月であるが、御法巻と幻巻の二つの述懐の間という点から見ると、これに先行して御法巻にも、類例がある。秋好む中宮からの弔問と歌の贈答である⁹⁾。

冷泉院の後の宮よりも、あはれなる御消息絶えず、尽きせぬことども聞こえたまひて、

「枯れはつる野辺を憂しとや亡き人の秋に心をとどめざりけん

今なんことわり知られはべりぬる」とありけるを、ものおぼえぬ御心にも、うち返へし、置きがたく見たまふ。言ふかひありをかしからむかたの慰めには、この宮ばかりこそおはしけれと、いささかのもの紛るるやうに思し続けるにも涙のこぼるるを、袖のいとまなくえ書きやりたまはず。

のぼりにし雲居ながらもかへり見よわれ飽きはてぬ常ならぬ世に
おし包みたまひても、とばかりうちながめておはす。

(御法五一七)

秋好中宮は、光源氏が後見して冷泉帝の後宮に入ったが、

その話を藤壺とすすめて、実行には至らなかったが、彼女を事前に二条院に迎えようとして、その計画を紫上に打ち明けた際、光源氏は、

後には、げに知らぬやうにてここに渡したてまつりてむ、と思す。女君にも、「しかなむ思ふ。語らひきこえて過ぐいたまはむに、いとよきほどなるあはひならむ」と、聞こえ知らせたまへば、うれしきことに思して、御わたりの事をいそぎたまふ。(濡標三二一)

と、紫上には親しく交際するのによい相手だろうといい、紫上もそれを嬉しく思っていた。その後、二人は、少女巻・胡蝶巻で春秋争いの歌を贈答し、梅枝巻で明石姫の裳着の際に対面して、紫上の法華經千部供養には、秋好中宮も「御誦經、捧物などばかりのことを」(御法四九六)していたように、秋好中宮は、光源氏関係の多くの女性たちの中で紫上にとって、心に嫉妬などを持たずに親しくできた限られた女性なのである。しかも光源氏とは鈴虫巻で、互いに出家したい境遇を開陳し、慰めあっていた。であるから、秋好中宮は、これまでもしみじみとした弔問を重ねてきた。この御法巻の弔問は、そうした弔問の中の一つで、六条院移徙当初の春秋争いを想起しつつ、春を愛した紫上を歌で回顧した。「言ふかひありをかしからむかたの慰めには、この宮ばかりこそおはしけれ」とは、こうした

二人の女性と光源氏の交友の質を背景に持った言であり、紫上とこうした関係にあった秋好中宮の弔問であるから、これによつて光源氏が「いささかのもの紛るるやうに思し続ける」のも当然で、「涙のこぼるる」ことによつて、高橋氏も言われるように、光源氏の愛執は浄化・沈静化されていくのだと思われる。

もつとも、光源氏の「のぼりにし…」の返歌によれば、いまだ彼がかなり紫上に執着していること、明らかだ。しかし、この秋好中宮との贈答以前に語られる、墓上を引き合いに出して送られてきた致仕の大臣の弔問に対する光源氏の返事が、「もののみ悲しき御心のままならば、待ちとりたまひては、心弱くもと、目とめたまひつべき大臣の御心ざまなれば、めやすきほどにと」(御法五一五)、本心を糊塗して対応されていたのと較べてみるならば、秋好中宮との贈答で光源氏がいかに素直になつてゐるかがわかる。

こうした機構が、幻巻の一月で一層明瞭になるのである。その場合は、秋好中宮との贈答の後に語られる前掲の、

すくよかにも思されず、我ながら、ことのほかにほれ
ぼれしく思し知らるること多かる紛らはしに、女方に
ぞおはします。仏の御前に人しげからずもてなして、
のどやかに行ひたまふ。(御法五一七)

と、「女方」に籠つて勤行のかたわら、紫上に親昵してい

た侍女たちや匂宮らと紫上を回顧する折々である。光源氏は、新年の来客にも螢兵部卿宮にのみ内向きの部屋で対面したが、後、独り寝の夜を重ねる。

夜の御宿直などにも、これかれとあまたを、御座のあたりひき避けつつ、さぶらはせたまふ。つれづれなるままに、いにしへの物語などしたまふをりをりもあり。

なごりなき御聖心の深くなりゆくにつけても、さしもありはつまじかりけることにつけつつ、中ごろもの恨めしう思したるけしきの、時々見えたまひしなどを思し出づるに、などで、たはぶれにても、またまめやかに心苦しきことにつけても、さやうなる心を見えたりまつりけむ、何ごともらうらうじくおはせし御心ばへなりしかば、人の深き心もいとよう見知りたまひながら、怨じはてたまふことはなかりしかど、ひとわたりづつは、いかならむとすらむ、と思したりしを、少しにても心を乱りたまひけむことの、いとほしう悔しうおぼえたまふさま、胸よりもあまる心地したまふ。そのをりの事の心をも知り、今も近う仕うまつる人々は、ほのぼの聞こえ出づるもあり。入道の宮の渡りはじめたまへりしほど、そのをりはしも、…(幻五二二)

召人を含む侍女たちと思ひ出話をしては、紫上を苦しませた過去を思い出して悔むのだが、これは侍女たちと思ひ出

話をしながら、自己の記憶の中から紫上との事を思い出して後悔するだけではない。その当時の事情を知って、今も光源氏が近侍する侍女たちが、「ほのぼの聞こえ出づる」光源氏の知らない新情報もあつたのである。それが何であつたのかは、これ以後を読んでも明らかでない。しかし、この直後に言及される、女三宮の六条院降嫁当初の、三日目の夜と暁の件で見るならば、この幻巻の場に至るまで、光源氏が知らずにいたと思われる、その当時の紫上の姿があつた。夜光源氏を送りだしてから、女房たちが、紫上方が女三宮方にこのまま庄倒されたままでおられまいし、とはいえ、ちよつとした穏やかならぬ事がもちあがる都度、必ず厄介ないざこざが起こってくるだろうと、言いあつてゐるのを、紫上は知らぬ風に聞いて、六条院に多くの御婦人がおられるようだが、殿の御目に適つて花やかで高貴な御身分の方がおられずもの足りなくお思いであつたところ、女三宮がご降嫁になつたのは結構なことだ、同等以下の分際の者に自然と聞き流せないことも起こるものだ、ご事情あつてのご降嫁だから心置かれないうにしよう、と言つて（若菜上六六）女房たちをたしなめた。結婚が成立する三日目の夜、「目に近く移ればかはる世の中を行く末とほくたのみけるかな」の歌を光源氏の居る脇で書きつけて、心穏やかでなかつたはずの紫上は、光源氏を送りだして、

光源氏が女三宮方で男女の時間を過ごしている間、紫上が自分の心を抑えながら、女三宮方といざこざが起こらないよう女房たちを統率していた。このことなど、この幻巻の一月、侍女たちとの紫上回顧の思い出話の際に、初めて女房たちから聞いて知つたことだつたのではないだろうか。このようなことの類が、「そのをりの事の心をも知り、今も近う仕うまつる人々」によつて、光源氏に知らされ、光源氏は、自分との場以外での未知の紫上の姿を合わせ知つて、自分にとつての紫上の意味をより客観的に把握してゐたのだろう。

しかし、このような情報を得ても、光源氏が紫上のすべてを理解しえたかは疑わしい。というのは、紫上は自分の内面・思维全体を侍女たちに晒していたわけではなかつたからである。例えば、この三日の夜の場面では、他にも、紫上がこのように、女房たちをたしなめた後、いつまでも起きてゐるのも侍女たちが不審に思うだろうと、床に入つたけれど、独り寝が続くのも尋常な思いでいられず、次のように心中思う。

かの須磨の御別れのをりなどを思ひいづれば、今はとかけ離れたまひても、ただ同じ世のうちに聞きたてまつらましかばと、わが身までのことはうちおき、あたらしく悲しかりありさまぞかし、さてそのまぎれに、

われも人も命たへずなりなましかば、言ふかひあらまし世かは、と思しなほす。
(若菜上六八)

このように思い続けて寝つけないのを、女房達に気取られないよう、「うちも身じろぎたまはぬ」様子は、侍女たちは感じ取っていたかもしれないが、現在の同じ邸内での独り寝から、二十数年前の遠く離れた、いつ終わるとも知れぬ独り寝の続いた須磨時代を思い出して、その時の苦難を乗り越えたからこそ今があるのだと、気を奮い起こしていく紫上の内面を、女房達は知るはずもなかった。だから、この思惟は幻巻の回想時に光源氏にもまず語られなかったろうし、光源氏もこうした紫上の思いを認識していたかはなはだ疑わしいのである。

つまり、光源氏は、「そのをりの事の心」を知る侍女たちからの情報も加えて、紫上の内面そのままではない、自分なりの紫上理解を、「女方」に籠って積み重ねていったのである。この結果の認識が、前掲引用部分の、「さしもありはつまじかりけることにつつつ、中ごろもの恨めしう思したるけしきの、時々見えたまひしなどを思し出づるに」以下、朝顔宮や女三宮など、他の女性に関心を向けて、紫上を少しでも苦しませてしまった悔恨の思いなのである。だが、ここには、女三宮降嫁の決定を光源氏から聞いて、「今はさりととのみわが身を思ひあがり、うらなくて過

ぐしける世の、人笑へならむことを下には思ひつづけたまへど、いとおいらかにのみもてなし」(若菜上五四)、「世の聞き耳のなのめならぬこと」(若菜上六五)を意識して「さこそつれなく紛らはし」(若菜上六六)ていた紫上の姿は、光源氏によって、おそらく「何ごとともうらうじくおはせし御心ばへなりしかば、人の深き心もいとう見知りたまひながら、怨じはてたまふことはなかりしかど」(幻五二二)と、誤解されたままにある。それにもかかわらず、紫上を少しでも苦しめてしまった、光源氏の悔恨の思いは、紫上にとっても、それはそれで正しいものであったろう。

そして、この女三宮降嫁の三日目の回顧を軸とした女房との語らいに続いて、紫上追慕の思いを紛らわすため念仏読経をしがてら、女房と言葉を交わしつつ、幻巻の述懐がなされるのである。

つまり、御法巻の述懐と幻巻の述懐との間の四、五箇月、光源氏は外部と接触を絶った女方に籠って、仏道修行が常の生活に入り、自分の気持ちを紛らわせ、落ち着かせつつ、紫上にも光源氏にも親昵の侍女たちと思ひ出話をする中で、光源氏は、自分との場以外での未知の紫上の姿を合わせ知って、自分なりの紫上理解を積み重ね、自分にとっての紫上の意味をより客観的に把握していったのだと、考えられ

る。御法巻の悲しみに惑溺した心中思惟での述懐から、幻巻の勤行の傍ら、常態化した独り寝を話の枕にして、召し人でもある侍女たちに向って、語られた客体的な自己認識との間には、こうした時間の流れと、体験の蓄積があったのである。

三 二つの述懐の間

しかし、こうした時間の流れと体験の蓄積によって、御法巻と幻巻の二つの述懐の違いの出現が素直に理解されるわけではない。

その違いをいま一度示すと、仏が光源氏に認識させようとした世の様が、御法巻では「悲しく常なき世」という認識であるのに対して、幻巻では「世のはかなく憂き」・「人よりことに口惜しき契り」という、光源氏の人生把握に進み、また、紫上の死を、御法巻では「来しかた行く先も例あらじとおぼゆる悲しさ」と空前絶後の体験と見たのに対し、幻巻では「いまはのゆふべ近き末に、いみじき事のぢめ」と晩年における最後の大事件と捉えて、自己の人生の終末が近いのを意識し、さらに、出家を実行する障害がないと考えるにも、御法巻では紫上を失ったことで、もうこの世に心残りが無いとしていたのに対し、幻巻では晩年に体験した大事件によって自身の「宿世のほど」も「心の

際」も見果てたから、と自己の人生と己の限界を冷静に把握していたのであった。つまり、御法巻での、紫上喪失後の衝撃の強さのため、世の無常と愛執の強さが前面に出ている述懐から、幻巻の、自己の人生の終末を見据え、自己の人生の質と性向の限界を見つめて、より客観的に広範囲にわたる述懐へと、深化していたわけである。このような認識の変化が、先に見た、二つの述懐の間に存在する、幻巻の行いを日常とする生活において、侍女たちと交わされ続けた紫上を核とする思い出話によってもたらされた紫上理解とどうつながるのか、そのことが考えられなければならない。

その手掛かりは、この二つの述懐の先にあるものの違いにあるだろう。御法巻では、空前絶後の悲しみにおぼれたままでは、仏道修行にも障害が出るとして、気持ちを落ちつけようとしていたのに対し、幻巻では自己の生涯の不如意も愛執の罪も思い知らされたのに、出家に際してはなおも情にひかれるだろうと己の心の弱さを見ている点である。

…、かくいまはのゆふべ近き末に、いみじき事のぢめを見つるに、宿世のほども、みづからの心の際も残りなく見はてて心やすきに、今なんつゆのほだしなくなりいたるを、これかれ、かくて、ありしよりけに目馴らす人々の今はとて行き別れむほどこそ、今ひと際

の心乱れぬべけれ。いとかなしかし。わろかりける
心のほどかな」とて、御目おしのごひ隠したまふに、

(幻五二五)

これは、光源氏による、目の前にいる侍女たちへの儀礼的
挨拶だけではない。紫上への愛執を引きずりつつ、紫上に
親しく仕え、光源氏にも親昵していた女房たちへの断ち切
りがたい執着を、やはりそれなりに自覚した言辞であろう。
その執着を、「わろかりける心のほどかな」と否定してい
るのである。この執着・「わろかりける心のほど」は、そ
の前の「心の際」、すなわち紫上の死をもたらすまでに到
らしめた、それまでの己の「愛執の心」に対する自己評
価(前掲丸山氏)につながるものであるが、この点につ
いては、後の幻巻三月における明石御方訪問の条に、光源
氏による明確な発言がある。

「人をあはれと心とどめむは、いとわろかべきこと、
といにしへより思ひ得て、すべていかなる方にも、こ
の世に執とまるべきことなく心づかひをせしに、おほ
かたの世につけて、身のいたづらにはふれぬべかりし
ころほひなど、とざまかうざまに思ひめぐらししに、
命をもみづから捨てつべく、野山の末にはふらかさむ
に、ことなる障りあるまじくなむ思ひなりしを、末の
世に、今は限りのほど近き身にてしも、あるまじきほ

だし多うかかづらひて今まで過ぐしてけるが、心弱う
も、もどかしきこと」など、さしてひとつ筋の悲しさ
にのみはたまはねど、

(幻五三三)

早くに出家してもよかつたわが身を晩年においてそれをお
しとどめたのが、紫上への思いを核にした愛執であつたと
暗に語っているのである。

この「わろかりける心のほど」、愛執の罪の意識は、近
親者との縁の薄さ・世の無常が主に意識される御法巻の述
懐ではいまだ明瞭でなく、幻巻の述懐において明確になる
が、この愛執の罪の自覚はどこからもたらされたのだらう
か。例えば、勤行のかたわら重ねられた侍女たちとの紫上
の思い出話の中では、光源氏の好き心によつて紫上を苦し
めたことへの悔悟が語られたりするが、

なごりなき御聖心の深くなりゆくにつけても、さしも
ありはつまじかりけることにつけつつ、中ごろもの恨
めしう思したる気色の、時々見えたまひしなどを思し
出づるに、なごり、たはぶれにても、またまめやかに
心苦しきことにつけても、さやうなる心を見えたてま
つりけむ、…、少しにても心を乱りたまひけむことの、
いとほしう悔しうおぼえたまふさま、胸よりもあまる
心地したまふ。

(幻五二二)

これは、広い意味の、「人をあはれと心とどめむ」ことで

はあるが、「さしてひとつ筋の悲しさにのみはのたまはねど」と言つて暗示される紫上への思いを核にした愛執の罪を直接指しているわけではない。他に、愛執の罪の自覚として、述懐や紫上の死に関わつて考えられるのは、紫上の度重なる出家の願いを光源氏が拒み続けてきたということであろう。

紫上は、若菜下巻冷泉帝の讓位後、三十代も後半に入り、「この世はかばかり、と見はてつる心地する齢ひにもなりにけり」（若菜下一六七）と述べて以来、繰り返し光源氏に出家の許しを請うて来た。だが、光源氏は、女三宮事件以前は女三宮の後見役であるため、女三宮出家後は、さらに大患後の衰弱した紫上が心配で、自身は堅固な心境での出家ができないために、自分より先に紫上が出家することを許さずに来た。このため紫上は没年である御法巻の三月に二条院で法華經千部供養を行う頃には、「後の世のためにと、尊きことどもを多くせさせたまひつつ、いかでなほ本意あるさまになりて、しばしもかかづらはむ命のほどは行ひを紛れなく、とたゆみなく」（御法四九三）後世を願つて真摯に出家を望んだが、全くそれを許さぬ光源氏を、「恨めしく思ひ」、「わが御身をも、罪軽かるまじきにやと、うしろめたく」（御法四九五）思うまでになつていた。光源氏はこうした若菜下巻以来の紫上とのやりとりの中で、

紫上の出家願望を十分承知しており、それが仏の奨める尊い行為であることも認識していたはずであるが、先ほどのような自身の理由でそれを拒んできた。その結果が紫上の死であつた。彼女の死の直後、光源氏が夕霧に彼女の落飾を指示したのは、せめて死後でも紫上の生前の望みをかなえて後世の明かりにとの考えであつたろうが、

「かく今は限りのさまなめるを、年ごろの本意ありて思ひつること、かかるきざみにその思ひ違へてやみなむがいといとほしきを、。この世にはむなしき心地するを、仏の御しるし、今はかの冥き途のとぶらひにだに頼み申すべきを、頭おろすべきよしものしたまへ。

…」

（御法五〇七）

夕霧は光源氏の口にした「この世にはむなしき心地する」を衝き、死後の落飾の無意味さを指摘した。物の怪のなせるわざならば、落飾は蘇生・延命の効果までも期待でき、価値があるうが、

「御もののけなどの、これも、人の御心乱らむとて、かくのみものはべめるを、さもやおはしますらむ。さらば、とてもかくても、御本意のことはよろしきことにはべなり。一日一夜忌むことの験こそは、むなしからずははべるなれ。まことに言ふかひなくなりはてさせたまひて、後の御髪ばかりをやつさせたまひても、

ことなるかの世の御光ともならせたまはざらむものから、目の前の悲しびのみまさるやうにて、いかがはべるべからむ」

(御法五〇七)

本当に死んだのならば、髪を剃っても後世の導きにはならずに、眼前の悲しみばかりがつるのである。光源氏はここで正論を突きつけられたのである。光源氏中心の身勝手な言動、甘えた思いやりの偽善を指摘された。この場での死直前、存命中の落飾は、後世への送り出し・旅立ちとしての意味が強いが、もし紫上を本人の望みどおりこれ以前に早く出家させていたのなら、紫上はその功德で延命していたかもしれない。「大貳の乳母のいたくわづらひて、尼になりける」〔夕顔一三五〕…、「忌むことのしるしによみがへりてなむ」〔夕顔一三八〕。「静かに籠りゐて、後の世のことを勤め、かつは齢をも延べむ」〔絵合三九二〕、「なほ、え生きたるまじき心地なむしはべるを、かかる人は罪も重かなり。尼になりて、もしそれにや生きとまると試み、また亡くなるとも、罪を失ふこともやとなむ思ひはべる」〔柏木三〇一〕。そして、目の前のこの現実と悲しみはなかったかもしれないのである。光源氏はこの時、はっきりと仏の教えに従おうとしていた紫上の出家を拒みとおすことで得た、紫上の喪失というその報いを、心の奥底がつぶされる思いで認識したのではないか。そして、光源

氏が紫上の死をとおして、道心を抱きながらも出家せずに現世に執し、しかも人の道心まで抑圧してきた自分の罪と在りようの背後に、仏の仕向けを意識しだし、わが身を「悲しく常なき世を思ひ知るべく仏などのすすめたまひける身」と自覚することになったのだ、と推測することは十分自然であるだろう。だが、御法卷の述懐では、仏の仕向けについてはともかくとして、自身の愛執の罪の自覚についてはもう一步の近い距離にいるのだが、当座の惑溺に曇らされて、それはいまだ明瞭でない。それが、幻巻の述懐で明確に自覚されるようになってきたのは、この間、女方に籠り、行いに勤めて気を落ち着け、自身と紫上に親近する侍女たちと紫上の思い出話を重ねて、心を開き、紫上のより多面的な理解を得ることができて、自身を冷静により客観的に顧みられるようになったからだろう。それによって、紫上を失い、人生最大の悲しみに陥った原因に、藤壺の宮への執心に由来する女三宮受容、紫上への愛執の罪を明確に意識することが可能になったのだと思われる。

また、御法卷の述懐では「悲しく常なき世」というこの世と人生の無常の把握が主であったのに、幻巻の述懐では「世のはかなく憂き」・「人よりことに口惜しき契り」という、光源氏の人生把握に進み、「いまはのゆふべ近き末」と自己の人生の終末が近いことを意識している。これは、

御法巻の述懐で、紫上の死により「今は、この世にうしろめたきこと残らずなりぬ、ひたみちに行ひにおもむきなんに、障りどころあるまじきを」と、惑乱以外は、内的には出家するのに何のほだしもなくなったと認識し、自己の人生の終わりを実質的に意識していたのがベースとなっており、御法巻末、紫上の四十九日も終わる冬の始め頃には、

「今日やとのみ、わが身も心づかひせられたまふをり多かるを、はかなくて積もりにけるも、夢の心地のみす」（御法五一八）と、「わびつつも昨日ばかりはすぐしてきけふやわが身のかぎりなるらん」（拾遺和歌集恋一六九四、題しらず、よみ人しらずへ『新編国歌大観』による）の歌を引いて、自己の人生の閉じめを常に意識する状態に至っている。そして、その上に、「世のはかなく憂き」・「人よりことに口惜しき契り」という、光源氏の人生把握に進んだのは、これは、深化というより、やはり阿部氏が指摘されたもののだが、御法巻の述懐に先立って、それにつながる若菜下巻にみえる光源氏の半生の回顧時の認識を再生させたというべきものである。六条院の女楽の後、三十七歳になった紫上に身を慎むように告げて、光源氏はこう続けた。

「みづからは、幼くより、人に異なるさまにて、ことごとしく生ひ出でて、今の世のおぼえありさま、来し

方にたぐひ少なくなむありける。されど、また、世にすぐれて悲しき目を見る方も、人にはまさりけりかし。

まづは、思ふ人にさまざまおくれ、残りともれる齡の末にも、飽かず悲しと思ふこと多く、あぢきなくさるまじきことにつけても、あやしきもの思はしく、心に飽かずおぼゆること添ひたる身にて過ぎぬれば、それにかへてや、思ひしほどよりは、今までもながらふるならむ、となむ思ひ知らるる。…」（若菜下二〇六）

先天的な美質や恵まれた境遇と対置される人生の悲哀の共存と、その悲哀に近親縁者との繋がり、薄さが存在するのは、御法巻の述懐と同じだが、悲哀の他の要素に、この回顧する四十七歳の時点で、いまだ「飽かず悲しと思ふこと多く、あぢきなくさるまじきことにつけても、あやしきもの思はしく、心に飽かずおぼゆること添ひたる」と言っている点が、御法巻の述懐にはなく、それを超えて、幻巻の述懐につながるものである。これは、御法巻では、紫上喪失後の衝撃の強さから、無常感と愛執の強さが光源氏によって意識され、前面に出ていたからであろう。

ここで言われている「悲しき目」の総体と具体は明確でないが、「飽かず悲しと思ふこと多く」とは、この時点でも、冷泉帝の後嗣がない点や、藤壺・六条御息所との事が想起され、「あぢきなくさるまじきこと」には鈴木日出男

氏のいわれるごとく、「明らかに父桐壺の最愛の妃である藤壺との禁断の恋ゆえの憂愁をさしている」⁽¹³⁾であろうが、それのみでよいかは不明だ。聞いている紫上にとつても察しのつくものとかないものがあつたであろう。光源氏個人にとつて辛く悲しく悔やまれる心の傷、痛みに触れること、例えば藤壺や冷泉院に関する秘密を、すべて紫上に知らせていたわけではない。のみならず、光源氏の人生には、物語の中に語られているものもあれば、語られていないものもある。四十七歳の光源氏にとつて、飽き足らず悲しいという人生の出来事や、体験せずに済んだらよかつたと悔やまれることが多々あつたのだということ、今のところはあれこれ想像しておくしかない。この事情は、幻巻の述懐に見える、「人よりことに口惜しき契り」、「世のはかなく憂き」ことの具体においても同様だ。ただ、若菜下巻では、そうした人生認識が、出家には繋がつておらず、人生への不如意感不満を抱いてきたが故に今まで命を繋いできたと言つて、不満意識の強い点、および、そうした不如意感不満意識の強さゆえに、光源氏が人生の背後に、いまだ仏の出家へのおもむけまでを意識しているとは見えない点、これは当然ながら光源氏がそうした仏のおもむけを無視して生きて来たと自覚しているとは見えない点が、御法巻の述懐とは異なる。

こうした若菜下巻の人生への不如意感不満意識が、御法巻の惑乱の渦中での述懐では背後に押し隠されて、その後、自身の人生の終末を意識し、女方での勤行生活のかたわら、侍女たちと「いにしへの物語などしたまふ」(幻五二二)中で、「人よりことに口惜しき契り」、「世のはかなく憂き」という、人生の総括的把握の色彩を持つ言辭となつたのだと思われる。

四 桐壺巻へ

こうして、御法巻と幻巻の二つの述懐の差異には、単なる時間の経過による効果のみならず(桐壺更衣を失つて悲しむ桐壺帝の詞を、輓負命婦はこう伝える。「しばしは夢かとのみたどられしを、やうやう思ひしづまるにしも、さむべき方なくたへがたきは、いかにすべきわざにか」へ桐壺二八)、外界との接触を避け、女方に籠つて、勤行に努め、そのかたわらでの紫上・光源氏の双方に親しい、つまり両者を知り、取り持つ侍女たちとの思い出話をとおして、紫上と自身の人生の実態と意味を見つめている光源氏の存在が大きく関わっている。光源氏は時間に押し流されているのではなく、世人の目にも自然のものと映る出家の時期が来るまで、紫上の死と彼女への愛執や思い出をとおして、自己と自己の人生の最終的な把握と、後世への準備を整え

ていくのである。紫上への愛執とまどいは、この述懐以後も、幻巻において十二月の文焼きまで、さらには御仏名まで（「なほ今年までは物の音もむせびぬべき心地したまへば」〈幻五四九〉）連綿と絶えることなく持続していくが、それにも抗して光源氏は、出家への歩みを進めていく。紫上への思いをさらに整理し、そこからより自由になり、紫上と自己との距離を再設定していく光源氏の姿は、幻巻の述懐以降も、引き続き語られていく。その具体は機を改めて見ることで、桐壺巻以来の、物語の主宰者としての光源氏が、五十二年の自分の人生の最後に、己を見つめ、その姿を自分の物として把握しようとしたことは、やはり大きく評価されてしかるべきものであろう。これは、紫上を、また女三宮をとおして、その根源である藤壺宮の存在に至り、さらにその背後の母桐壺更衣の面影に遡って、その先にある、彼女を愛して惑乱した父桐壺帝と、光源氏との重なりをも想起させてくるからである。

注

(1) 阿部秋生氏「六条院の述懐」（『光源氏論 発心と出家』一

九八九年、東京大学出版会。『東京大学教養学部紀要』39、一九六六年十二月、同上48、一九六九年十二月、同上55、一九七二年五月、初出。）

(2) 源氏物語の引用は、新編日本古典文学全集本による。漢数字は頁数。ままた表記を変えた。

(3) 丸山キヨ子氏「光る君を考える」（『源氏物語の伝教』一九八五年、創文社）

(4) 藤井貞和「『宿世遠かりけり』考」（『源氏物語の表現と構造』一九七九年、笠間書院）、参考。藤井氏は光源氏の意識下を述べているわけではない。

(5) 阿部秋生氏「今年をばかくて忍び過ぐしつれば」（『光源氏論 発心と出家』一九八九年、東京大学出版会）

(6) 注5に同じ。

(7) 引用は、新潮日本古典集成本による。

(8) 高橋文二氏「思い出―執と浄化としての軌跡―源氏物語「幻巻」小見―」（『国語と国文学』一九八二年一月）

(9) この箇所性格に注目した論に、松木典子氏「『源氏物語』幻巻の光源氏の「孤独」について―御法巻における秋好中宮との贈答場面を起点として―」（『平安文学研究』6、一九九七年十二月）がある。

(10) 三田村雅子氏「召人のまなざしから」（『源氏物語感覚の論理』一九九六年、有精堂出版）は、幻巻紫上回想と述懐の場に、中納言や中将など召人がいることの意味を、彼女たちが紫上の「境遇に共感・同情しつつ、見てきたものは、終始共に生きたはずの光源氏の遠く及ばないものであり、紫上の苦悩の証人として、『そのをり』『かのをり』を光源氏に繰り返し語り聞かせ」、紫上が女三宮降嫁により受けた打撃を

女房にも気どられぬよう心をくだいた「抑制にもかかわらず、周辺に仕える女房達は、紫上のふと漏らす溜息や、物思いや、眠られぬ夜のみじろぎに、女主人の苦悩をかぎつけていた」、「それは彼女達自身が、一度は光源氏の愛を受けた身である」と切り離しがたく結びついた嗅覚であり洞察であつたと言えよう」二七六頁～二七七頁、という。

- (11) 松岡智之氏「幻巻の光源氏と蜻蛉巻の薫―作中人物と『仏』―」(『新物語研究』4、一九九六年、若草書房)では、光源氏が紫上の死以前から仏の采配を感じていたと、書かれているように読めるが、その足掛かりになっている幻巻の述懐の、「強ひて知らぬ顔にながらふれば」(御法巻の「心強く過ぐして」に相当する)における(気づいていながら)「強ひて知らぬ顔」の対象は、「世のはかなく憂きを知」るに至るような、「人よりことに口惜しき契りにもありけるかな、と思ふこと絶え」なかったという体験と認識だろう。松岡氏が引き合いに出されている阿部秋生氏「六条院の述懐」もそのように考えているのだと思う。御法巻の「いはけなきほどより、悲しく常なき世を思ひ知るべく仏などのすすめたまひける身を、心強く過ぐして」も、状況は同様だ。

- (12) 注1に同じ。

- (13) 鈴木日出男氏『源氏物語虚構論』「第六編 光源氏晩年の物語 第八章 光源氏の物語の終末」(二〇〇三年、東京大学出版会)。